便利な「スマートキー」

機能を悪用 車窃盗

大阪で新手口確認

車のキーを近づけるだけで、電波でドアのロックを解除しエンジンを始動できる「スマートキー」の機能を悪用した疑いのある盗難未遂事件が、大阪府内で確認された。離れたキーと車の電波を特殊な機械で中継して解錠する「リレーアタック」と呼ばれる新たな手口で、今後国内で被害が広がる恐れがある。

昨年9月下旬、大阪府東大阪市の住宅。白いマスク姿の男が玄関に近づき、アンテナの付いた機械を住宅に向けると、敷地に止めていた国産高級車のハザードランプが点滅、わずか5秒ほどでドアロックが解除された。防犯カメラが一部始終を捉えていた。

仲間の1人が車に乗り込んだが、通行人に気付き盗まず逃走。所有者の男性(37)が確かめると、エンジンを2回始動しようとした形跡があった。男性は「こんなに簡単に解錠するとは。メーカーにはきちんと対策を考えてほしい」と話す。

自動車用品店「エムズスピード大阪」(東大阪市)によると、リレーアタックは1人が車から出る電波を特殊な機械で増幅させ、家の近くでもう1人が中継し屋内にあるキーに送信。キーの折り返し電波を車に送ると「近くにキーがある」と認識し解錠、エンジンがかかる仕組みだ。通常、車の電波は1メートルほどしか届かないが、東大阪市の事件では車とキーは約10メートル離れていた。

自動車評論家の国沢光宏さんによると、リレーアタックは欧州でまず確認され、2016年にドイツの自動車業界団体が注意喚起した。昨年以降、東大阪市のほか大阪市でも同様の手口によるとみられる盗難未遂被害が発生。捜査関係者は「痕跡が残らないため、被害実態を把握しきれていない可能性がある」と指摘する。

こうした被害を防ぐためには、電波を遮断する特殊な素材を使ったキーケースが有効だ。一部の車種では、キーから電波を発信しない「節電モード」の設定も導入されている。国沢さんは「在宅中だけでなく、外出先でも電波を通さないケースやポーチに入れて自衛する必要がある」と話している。

「リレーアタック」全国で広がる恐れ

青酸カリ送付し脅迫

3都道府 製薬や食品会社など

東京都内の製薬会社6社と毎日新聞社東京本社、大阪市内の製薬会社、札幌市内の食品会社に、青酸カリとみられる白い粉末と金銭を要求する脅迫文が郵送で届いていたことが26日、警視庁などへの取材で分かった。

いずれも25日に届き、警視庁などは恐喝未遂容疑で捜査。昨年1月にも都内と大阪府内の複数の製薬会社に同様の脅迫文が送られており、関連を調べる。

警視庁によると、都内の製薬6社と毎日新聞社には、粉末とA4サイズの紙が入った封筒が届いた。粉末は、簡易鑑定で青酸カリとみられることが判明。紙には「青酸カリを入れた偽物の薬を作って流通させる。2月22日までに350万ドルを(仮想通貨の)ビットコインで送りなさい。送らなければ悲劇が起こる」と書かれていた。送り先としてQRコードが記載されていたが、読み取れなかった。

差出人は各社で異なり、オウム真理教の松本智津夫元死刑囚=教祖名麻原彰晃=ら教団元幹部や関西の暴力団関係者の名前が記されていた。住所は都内の拘置所や刑務所で、消印は都内だった。

毎日新聞社に届いた文書には、教団元幹部らの「ご冥福をお祈りします」との文言もあった。

トピックス TOPICS

両陛下、結婚60年の写真展鑑賞

今年4月に結婚60年を迎える天皇、皇后両陛下は26日、東京都中央区の日本橋三越本店を訪れ、これまでの歩みを振り返る写真展を鑑賞された。

写真展では、婚約時代の両陛下の様子のほか、戦後50年の「慰霊の旅」で被爆地・長崎を訪れた際や、東日本大震災の被災地を訪れた際の写真など計135点を展示している。両陛下は、写真の前で足を止め「これはいつの写真ですか」「これは覚えています」などと昔を懐かしむ様子で話し合っていた。

これまでの歩みを振り返る写真展を鑑賞される天皇、皇后両陛下=26日午後、東京都中央区の日本橋三越本店

地域再生大賞は兵庫の団体

地域づくりに挑む団体を支援しようと北國・富山新聞など地方新聞46紙と共同通信が設けた「第9回地域再生大賞」の各賞が26日決まった。大賞(副賞100万円)は、通訳などの活動で外国人と地域をつなぐ「多言語センターFACIL(ファシル)」(兵庫)に贈呈。準大賞(同30万円)は農村活性化に挑む「きらりよしじまネットワーク」(山形)と、離島で介護事業を行う「いけま福祉支援センター」(沖縄)に決まった。

能登島観光協会青年部(七尾市)、ふるさと体験inみやざき実行委員会(富山県朝日町)は、地域への貢献を評価して優秀賞となった。

桐生悠々の番組に大賞

反戦を訴え続け、2016年8月に101歳で死去したジャーナリストむのたけじさんの精神を受け継ぐため創設された「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」(略称・むのたけじ賞)の第1回受賞者が26日発表され、北陸朝日放送ディレクターの黒崎正己さん(50)が制作したドキュメンタリー番組「言わねばならないこと―新聞人桐生悠々の警鐘―」が大賞に決まった。

信濃毎日新聞主筆などを務め、戦前に軍部を批判した金沢市出身の反骨のジャーナリスト桐生を取り上げた作品で「ジャーナリズムの意義を深めた」と評価された。

佐川氏を「不起訴相当」

「文書改ざん、非常に悪質」 検察審

学校法人「森友学園」への国有地売却に関し、改ざん文書を国会に提出して国会議員の業務を妨害したとして、偽計業務妨害の疑いで告発された佐川宣寿前国税庁長官らについて、東京地検が不起訴処分とし、その後、東京第5検察審査会も「不起訴相当」と議決していたことが26日、分かった。

日本人初ルート 南極単独踏破

冒険家阿部さん会見

単独歩行で南極点に到達した秋田市出身の冒険家阿部雅龍さん(36)=東京都在住=が26日、都内で記者会見し「非常に厳しい条件だったが、何とか南極点にたどり着くことができ安堵している」と振り返った。支援者によると、55日間そりを引きながら、日本人としては初めてのルートを約920キロ踏破した。現地時間の昨年

記者会見する冒険家の阿部雅龍さん=26日午後、東京都板橋区

「人類の限界超えを」

三浦さん鍛錬決意 南米・登頂断念で報告会

アルゼンチン西部にある南米大陸最高峰アコンカグア(6959メートル)への登頂を断念し、帰国した冒険家三浦雄一郎さん(86)が26日、東京の事務所で報告会を開いた。断念に悔しさをにじませながらも「人類の年齢的な限界を超えてみたい」として、究極の夢と位置付ける「90歳でエベレスト」を実現するためトレーニングを重ねる決意を語った。

三浦さんは標高6千メートル付近にとどまっていた現地時間20日、同行する大城和恵医師からドクターストップを示された。

三浦さんは、英国の登山家ジョージ・マロリー氏の名文句「そこに山があるから」を引き合いに「僕は『そこに年があるから』」と年齢的限界への挑戦を続けると語った。

帰国報告会で話をする三浦雄一郎さん。左は次男豪太さん=26日午後、東京都渋谷区